

# 英語辞書編集を巡る最近の話題：コーパス、直観的判断、紙の辞書、デジタル辞書

南出 康世

## 1. コーパスとは

昔 *Corpus* という同人誌(六甲英語学研究会発行)があった。創刊号(1969)の「発刊のこぼしに代えて」で、故小西友七先生は「corpus とは、頭だけで考えず、体全体で考えることと、同時に幅の広い linguistic corpus を基盤とし、みなでそれを培ってゆくという願いを込めたものである」と述べておられる。小説や新聞を目で読み、あるいは映画を目で見て耳で聞いて、必要な情報を手でカードに書き取り、集まったカードに見出し語を打ってアルファベット順に整理する、こういった作業全体を「体全体で考える」と表現したものと私は解している。用例カードは『ジーニアス英和辞典』の初期の頃は紙ゲラと共に郵便で送られてきた。ゲラの中身によって異なるが、カードは、多いときに数十枚もあった。このような環境で育ったので、コーパス=コンピュータコーパスという等式は私に馴染まなかった。手元の蔵書目録をチェックしてみると、コンピュータ・コーパスを書名にした和書が一点あった。田島松二(1995)『コンピュータ・コーパス利用による現在英米語法研究』(開文社)である。洋書では computer[computerized] corpus[corpora] は複数ヒットしたので一点のみあげる。Johansson, D. (ed.) 1982. *Computer Corpora in English Language Research*. (NCCH). いずれも 1980-1990 年代の研究書である。当時は従来のコーパスと区別するためにコンピュータ[computer]をコーパス[corpus]の前に冠する必要があったのであろう。

## 2. コリンズ・コウビルドの辞書

しかし一方では同じ年代に「コーパス革命」が急激に進行しつつあった。それを象徴する出来事を私は経験した。1987年3月にパーミンガム大学で *Collins Cobuild English Language Dictionary* の公示発表会があるとの情報があった。当時私はロ

ンドン大学に留学していたので早速出席した。“Authentic 90,000 examples from the Bank of English”, “the patterns of use in millions of words of text”, “full sentence definition”, “extra column” など初めて聞くフレーズが飛び交う熱気に圧倒されて時の経つのを忘れた。英国では John Sinclair (1933-2007)の率いるコリンズ・コウビルドチームが辞書編集に「コーパス革命」を引き起こしつつあることを実感して帰国することができたのは幸せであった。

日本でも上記の辞書は大規模なコンピュータ・コーパスを全面的に活用した辞書として華々しく登場した。日本語使用説明書付き箱入りの和書版『コウビルド英語学習辞典』も出た。コーパスを利用した辞典の編集はコリンズに止まらなかった。オックスフォード、ケンブリッジ、ロングマンなどの英国の老舗辞書会社が相次いで新辞書、改訂版を発行した。いくつかあげる：*Cambridge International Dictionary of English* (CIDE), *Cambridge Advanced Learner's Dictionary* (CALD1-4), *Macmillan English Dictionary for Advanced Learners* (MED-AL1-2), *Longman Dictionary of Contemporary English* (LDOCE3), *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* (OALD5), などが次々出版され「ESL 辞典の黄金期」と称された。しかしいつしか CIDE, CALD, MEDAL は店頭から姿を消し、現在のところ LDOCE は第6版(2014), OALD は第10版(2020)は店頭で見かけますが、上記の辞書の多くは没個性的な形でネット辞書に移行したようだ。なお、*Collins Cobuild English Language Dictionary* は、その後 Intermediate 版/Student 版などが出たこともあって、それらと区別するため第3版では *Collins Cobuild Dictionary for Advanced Learners* に書名変更し、さらに第4版から *Collins Cobuild Advanced Learner's*

Dictionary となり、現在の第 9 版に至っている。2023 年 4 月には紙辞書 10 版が出るようだ。

### 3. コーパスと直観的判断の相補性

英語辞典の編集に関わる者にとって、コーパスはありがたい存在である。英語のネイティブスピーカーは自分の直観をコーパスで確認・補足できる。日本人にとっても辞書編集に不可欠なツールとなった。しかし、コーパスだけでは英和辞典は作れない。ネイティブスピーカーの直観を引き出すいわゆるネイティブチェックも必要である。コーパスとネイティブスピーカーの直観は相補的である。それを例証してみよう。『今何時ですか』の英語訳に *What time is it now?* を提示している英和・和英辞書が多いが、*now* は冗語的で不要ではないかと言う質問がきた。BNC(1 億語)、COCA(10 億 1 千万語)、Wordbanks(6 億語)で検索して下記の結果を得た。

	COCA	BNC	Wordbanks
What time is it?	287	96	26
What time is it now?	17	8	4

ヒット数から判断すると「今何時ですか」は「*What time is it?* で *now* は不要」ということになるが、ネイティブチェックをしてみると、一概にそうはいえないという反応であった。そこで次の例文を作って He said, “We have to be home in time for the baseball game. It starts *at seven*,” and asked, “*What time is it (now)?*” I consulted my watch and said, “It’s nine thirty.” He shrugged his shoulders...

*now* のあるのと無いのでいずれが自然かネイティブチェックしたところ、この文脈では *now* がないと不自然との予期した反応を得たので、「*What time is it now?* は(予定のイベントまでの残り時間をチェックするような文脈で)今は何時ですかという意味合いで使われ、*now* に強勢が置かれる」のようにまとめられるだろう。コーパスで *now* の例が少ないから「*now* を省いて *What time is it?* と言うのが普通」というのは短絡的な結論であることがわかる。単純に生起頻度数を過信すると誤った結論に達することが多い。コーパスとネイティブスピーカーの直観的判断は相補的だということを改めて認識した次第である。

### 4. 紙の辞書とデジタル辞書

コーパスの大規模化により、辞書に取り入れるべき情報は格段に増えた。デジタル辞書には紙数の制限はないが、紙の辞書にはこの巨大な情報を飲み込む容量がない。この観点から紙辞書の将来を展望してみよう。つい最近まで紙の辞書と携帯電子辞書と優劣比較が研究会や学会で盛んに行われていた。紙の辞書の一覧性が携帯電子辞書の折りたたみ式表示に勝るといというのが大体の意見であったように思う。しかし、キーボード入力や画面タッチで徐々にテキストを開いていくことが当たり前の技術になり、しかも一冊の携帯電子辞書は通例複数・異種の辞書を同梱しており、しかも発音まで聞けるとなると、紙の辞書との比較そのものにあまり意味がなくなった。今後、携帯性という面で携帯電子辞書に変わるのはスマートフォン辞書である。正規の辞書アプリをダウンロードすれば、もはや一覧性云々といった問題は生じないが、スマートフォンは多機能なだけに学校の授業に持ち込むことは問題がある。米国のある辞書学者は「読書していて単語を調べる場合には、たぶん皆さんの 80% の人がしているように私はコンピュータを起動してオンライン辞書を使うか、スマートフォンのアプリを使うだろう」と自身のブログで言っている。日本でも大体このような状況で事態は進行しているのではないだろうか。デジタル辞書には紙数の制限はないが、紙の辞書には判型と重量という厄介な問題があって、この巨大な情報を飲み込むだけの容量がない。もう一つ別の問題がある。高校英語教科書でもデジタル化が進んでいる。しばらくは紙とデジタルの教科書は併存するだろうが、もし完全にデジタル版に移行すれば、教科書と共に各種辞書もタブレットに同梱されるのではなかろうか。となると、紙の辞書、とりわけ紙の学習英和辞典は大きな影響を受けるだろう。

紙の教科書かデジタル教科書かに関して、文部科学省は必ずしも二者択一でなく複数のプランを考えているようだが、紙の辞書とデジタル辞書との悩ましい関係は今後しばらく続くであろう。しかし、いずれにせよ、コーパスから得られる膨大な情報と、ネイティブスピーカーの直観的判断を相補利用するという英和辞書編集の根幹部分は揺るがないであろう。

(大阪女子大学 名誉教授)